

Online Papers

ISSN: 2433-9369

Japanese Association of Industrial Counseling TODAY

オンライン論集

日本産業カウンセリング学会

TODAY

VOL. 3 No.3 Mar. 2021



一般社団法人 日本産業カウンセリング学会

オンライン論集『日本産業カウンセリング学会 TODAY』について

本誌、オンライン論集『日本産業カウンセリング学会 TODAY』は、勤労者の健康、福祉、能力開発に貢献することを目的として、産業領域のカウンセラー、キャリアコンサルタント、臨床家、研究者などが立場や分野を超えた会員の相互啓発と社会への提言を目指し、2018年に創刊しました。

産業領域でのカウンセリング、キャリアコンサルティングに限らず、働く人たちの現状などについての情報、取組などを振るって原稿をお寄せください。そのほかにも、価値ある情報と思われるが、体裁の整った論文には至っていない、客観的データが十分得られなかったなど、査読付き論文集へ投稿を躊躇している方は、本誌への投稿をご検討ください。原則、自由投稿ですので、多くの方の積極的な投稿を歓迎いたします。

発行は電子刊行物として、産業カウンセリング学会指定の方法でウェブ上に公開します。

投稿いただける内容は、

(1) レポート（取組報告、体験報告、研修会報告、その他）

企業や団体、学校などでのカウンセリング、コンサルティングなどの実践者が行った取組についての報告や会員が参加した研修などの体験に基づく報告など、関係領域の進展や促進をするために発表など。

(2) ディスカッションペーパー

研究の進展と交流を促進するために、研究の過程または成果を公刊に先立って、迅速かつ簡易な方法で発表するもの。同一内容または一部を修正した論文の公刊はこれを妨げない。

発行希望者は、発行論文のタイトル名、本文の入った Word 形式の電子ファイルおよび「投稿論文チェックリスト」を、日本産業カウンセリング学会事務局『日本産業カウンセリング学会 TODAY』編集委員会に提出してください。

2019年12月

日本産業カウンセリング学会 TODAY

編集委員長 小玉一樹

オンライン論集『日本産業カウンセリング学会 TODAY』投稿規程

1. (発行の趣旨)

オンライン論集『日本産業カウンセリング学会 TODAY』は、会員の実践および研究の促進を目的とした、取組報告、体験報告、研究などを公刊する電子刊行物(Electronic Publication)である。

2. (投稿者)

本誌に投稿できる者は、次のとおりとする。

- (1) 日本産業カウンセリング学会会員
- (2) 日本産業カウンセリング学会会員を筆頭著者とする共同執筆者
- (3) その他特別に編集委員会が承認し、または依頼した者

3. (論文等の種類)

投稿する論文等は次の種類とする。

- (1) レポート (取組報告、体験報告、研修会報告、その他)

企業や団体、学校などでのカウンセリング、コンサルティングなどの実践者が行った取組についての報告。また、会員が参加した研修などの体験に基づく報告など、関係領域の進展や促進をするために発表するものであること。

- (2) ディスカッションペーパー

研究の進展と交流を促進するために研究の過程または成果を公刊に先立って、迅速かつ簡易な方法で発表するものである。同一内容または一部を修正した論文の公刊はこれを妨げない。

4. (発行形態)

- (1) 電子刊行物として発行する。
- (2) 日本産業カウンセリング学会指定の方法でウェブ上に公開するものとする。

5. (発行方法)

- (1) 発行希望者は、発行論文のタイトル名、本文の入った Word 形式の電子ファイルおよび「投稿論文チェックリスト」を、産業カウンセリング学会事務局『オンライン論集 日本産業カウンセリング学会 TODAY』編集委員会に提出する。
- (2) 提出後、編集委員会は必要に応じて申請者に修正を求めることが出来る。
- (3) 承認された原稿は発刊番号が付与された後、日本産業カウンセリング学会が現在及び将来において指定するサーバーにアップロードし、ウェブ上にて公開する。

(4) その他発行に関わる作業について、発行希望者は編集委員会の指示に従うものとする。

6. (刊行物の規格)

(1) 文字数

5000 字から 20000 字程度とする。

(2) 本文 (和文原稿)

論文体裁は「TODAY 執筆要領」に定めるが、原則として次のとおりとする。

1) 原稿サイズ

A4 版縦用紙を用い横書き 1 段とし、余白は縦横 30 mm とする。

2) 文字数および文字サイズ

横 40 字×縦 45 行とし、タイトル文字サイズは 16 ポイント、本文の文字サイズは 10.5 ポイント、見出し以外の本文書体はすべて明朝体 (英文は Century) とする。但し、図表に関してはこの限りではない。

3) その他

本文 1 頁目冒頭に、「表題」、「著者名」、「要旨」「キーワード (5 つまで)」を記述する。その後「本文」、「引用文献」とし、最終頁に「英文表題」、「英文著者名」、「英文 要約 (Abstract)」「英文キーワード」の順で記述する。ただし、英文は省略できるものとする。

図表、引用文献など、その他の項目に関しては「TODAY 執筆要領」に準じ、必要に応じて編集委員会で決定する。

7. (著作権)

『オンライン論集 日本産業カウンセリング学会 TODAY』に掲載された個々の論文等の著作物の著作権は著作者に属し、日本産業カウンセリング学会は編集著作権を持つものとする。また著作者は、『オンライン論集 日本産業カウンセリング学会 TODAY』に掲載された個々の著作物について、著作権の行使を本学会に委任するものとする。その場合にも、当該著作者が自ら著作権を行使することを妨げないものとする。

8. 附則

本規程は平成 30 年 4 月 1 日から施行する。

オンライン論集『産業カウンセリング学会 TODAY』

投稿論文チェックリスト

ご投稿いただく前に、以下の 10 項目についてご確認ください。すべての項目に「はい」に○印がなく、内容や形式が規程に適合していない場合、編集委員から詳しい情報を求めたり、再提出をお願いしたりすることがあります。

(いずれかをクリック)

1. 「投稿規程」にもとづいて作成しましたか。 はい・いいえ
2. 表題，要約，本文，引用文献，脚注，図表などは揃っていますか。 はい・いいえ
3. 原稿の書式は規程に従っていますか。 はい・いいえ
4. 図表は規程に沿って作成していますか。 はい・いいえ
5. 引用文献の書式は規程に従っていますか。 はい・いいえ
6. 引用文献リストと本文中の引用箇所は照合していますか。 はい・いいえ
7. 論文の記述は，日本語として適切ですか。 はい・いいえ
8. 英文要約の英語は適切ですか（必要な場合）。 はい・いいえ
9. 研究の対象となる者および団体・組織に当該研究の公表について，十分に説明し，同意を得ていますか。 はい・いいえ
10. 研究の対象となる者および団体・組織を特定できる情報が漏えいしないために必要な措置を講じましたか。 はい・いいえ

もくじ

レポート

「外から言葉を与える」ことによるクライアントの内省の可能性……………1

渡部昌平（秋田県立大学）

レポート

「外から言葉を与える」ことによるクライアントの内省の可能性

渡部昌平¹（秋田県立大学）

要旨

キャリア分野では、近年、臨床心理学分野に遅れてクライアントの内面を問う質的アセスメントが導入されてきたが、支援者がクライアントの外から与えた言葉によってもクライアントの内省が進む場合がある。

本研究ではユング心理学の用語をイメージして被験者に自己について内省してもらった結果、被験者からこれまでにない自己に関する語り（ナラティブ）が生じ、被験者の感想からも一定の自己理解が進む効果が示された。一方で、被験者の分析力・理解力・言語化能力に依存するという課題も示唆された。

キーワード：質的アセスメント、クライアント、内省、（クライアントの）外

問題と目的

構成主義あるいは社会構成主義に基づくキャリア理論は臨床心理学に遅れて本邦に紹介され、Savickas(2011;日本キャリア開発研究センター監訳, 2015)のキャリア構築理論、Cochran(1997;宮城・松野訳, 2016)のナラティブ・アプローチなどが知られる。また以前からライフライン（河村, 2000）、職業カードソート（下村・吉田・石井・根本・菰田, 2003）などのナラティブ技法がキャリア支援の現場で用いられている。

質的キャリア・アセスメントとも呼ばれるこれら技法は、クライアントの仕事観・人生観に関する語りを引き出す。分類すると(1)ライフラインなどこれまでの人生を描写させて望ましい将来を考えさせるもの、(2)職業カードソートなど提示された刺激から適合しているものを選ばせるもの、(3)ロールモデルやキャリア・ジェノグラムなど周囲からの影響を考えて望ましい将来を考えさせるもの、(4)初期記憶やよく見たテレビや雑誌など人生観・仕事観に影響を与えそうなテーマについて質問するものなどがある。

一方、それらクライアントの内側にある人生観・仕事観を掘り起こすアセスメントとは異なり、支援者がいわばクライアントの外から言葉を与える支援もある。例えば医師の診断であり、精神分析家の解釈であり、職業適性検査・職業興味検査などのテストの結果であり、カウンセラーの解釈あるいはアドバイスやコメントなどである。

例えば依田（2014）は精神病レベルでないがコミュニケーションが取りづらいクライアント（不登校の中学生、ひきこもりの成人男性、夫婦カウンセリング）にロールシャッハ・テストの結果をフィードバックすることで、クライアントの内省が進んだことを紹介している。内省の前に何らかの「結果」があったほうが、内省が進みやすいという指摘である。渡部（2021）はタロットの提示によってクライアントの内省が進んだことを紹介し、自ら話すのが苦手なクライアントへの有効性を示唆している。外から与えられた言葉によって自分について考えることで、いわゆる外在化が可能になるという示唆とも言える。

¹ 大学代表 018-872-1500 / watanabe-s@akita-pu.ac.jp

そこで本研究では、クライアントが語る言葉からではなく、支援者が「外から与えた言葉」によってクライアントが自らを分析することで、クライアントの内省が進むか否か、その効果や課題を含めて探索的に検討することを目的とした。

方法

特に心の問題を抱えていないカウンセラー資格保有者に協力を依頼し、依頼内容を「自己分析を進めるための質問への回答」とした。

クライアントに与える言葉として、クライアントが自分の考え方の枠組みから離れて自己分析できるよう、ユング心理学を参考にクライアントの中の「アドバイスをくれる知恵者」「何でも受け入れてくれる存在」「いたずらっこ」「ヒーロー志向」「仮面」「影」（男性には）「女性っぽさ」（女性には）「男性っぽさ」について質問し、その質問に回答して自己分析が深まったか否かを回答後の自己理解を 10 として回答前の自己理解を 10 段階で評価してもらった上で、感想等を聴取した。協力者の負担を最小限にするため、自己分析は被験者のペースで行ってもらい、やりとりは電子メールで行った。

協力者に対しては、内容を研究発表に用いること、事例は匿名とし内容も要約して個人が特定できないようにすること、自由意志によっていつでも断れることを説明した上で、承諾を受けた。

結果

1 Aさん（40代男性）

アドバイスをくれる知恵者

- ・ 結構自分に対しても相手に対しても客観的。人は人、自分は自分。人と違うことに躊躇がない
- ・ とりあえずやってみよう、早め早めにやっ払いこう、と自分を鼓舞している
- ・ もっと外に出て人脈を作ったほうがいい（とアドバイスしているが、必ずしもできていない）

何でも受け入れてくれる存在

- ・ この部分は弱い、あまり自分のことも周囲のことも受け入れていない
- ・ 一応自分の弱さの存在は認めている、自分の過去・現在に肯定的というか受容的

いたずらっこ

- ・ 人と違うことを好む
- ・ お調子者、新しいこと・変化は嫌いではない
- ・ 外に出るといよりも、身内に甘えているほうが好き

ヒーロー志向

- ・ 恥ずかしがり屋で人の前に立つのは得意ではないのに認められたい、褒められたい、これは強い
- ・ 上昇志向、偉くなりたい
- ・ その場にいればリーダーやまとめ役、仲裁役にもなる（ただし押されないとやらない）

仮面

- ・ 家族関係かなあ、あとは性的興味とか
- ・ 恥ずかしがり屋、感激屋、褒められたり好かれたりすると嬉しいが返し方が分からない
- ・ 分からないことを人に質問するのは苦手かも
- ・ 人に見せていない部分は比較的少ないと思う、考えていることは伝わっていない（伝え

切れていない) かもしれない

影

- ・ 人に頼ったりお願いしたり、口説けない
- ・ いろいろな欲求をストレートに表現できない、分かって欲しいと思っても伝えない
- ・ 影はよく分からない、そこそこ自分を受け入れているので少ない

女性っぽさ

- ・ 料理は好き、人に教えるのも好き、あまり怒らない、違いを受け入れる
- ・ 歴史的事実よりも人間関係や感情に興味、負の感情を引きずりがち
- ・ 人と争って何かを勝ち取るのは好きではない、落ち着くところに落ち着けばいい

まとめ

- ・ 甘える・頼るのが苦手、認めて欲しいと強く思うけど理解してもらおう努力が足りない

実施前後の自己理解の変化

- ・ 実施後の自己理解を 10 だとすると、実施前は感覚的に 8。与えられた言葉で自己分析を考えるのは結構難しいという印象

今後への気づき

- ・ 「何でも受け入れる存在」の部分を意識して強くしていきたい。もうちょっと人に頼ったりお願いしたりしていきたいし、自分の気持ちを周囲に伝えた方がいい、と思いました

感想

- ・ この技法はまあまあ使えるが、与えられた言葉から具体的に自己分析を言葉にするのは思ったよりも難しい
- ・ 別の言葉のほうが考えやすいかもしれない(例えば「あなたの中のライオン」のような)
- ・ 普段考えないことを考えるきっかけにはなるな、と思いました

2 Bさん(40代男性)

アドバイスをくれる知恵者

- ・ 自分の知識を総動員してアドバイスしたくなる(自分を頼ってくる人の役に立ちたい)。研修でも受講者に「よいもの」をと研修資料に手直しをするから、この側面は相当強く持っている。ただそのアドバイスが、自分の価値観によるところもある。
- ・ 一方で、そのアドバイスに対する感謝やねぎらいを求めている。「教えてくれてありがとう」などの言葉を期待している。感謝の表明がなかったり、あっても表面的だと内心不快に思う。
- ・ 「自己の存在確認のための行動」ともいえる。頼られる、アドバイスをする、感謝されると自分の存在を感じる。いつも誰かに私の存在を認めてもらいたい、という切羽詰まった感を持っている。いわゆる「見捨てられ恐怖」「孤独が怖い」「認められたい」「頼られたい」「よく評価されたい」「分かってもらいたい」思いが常にある。
- ・ そのくせ、能動的に他者に働きかけることは少ない。頼られたい、すなわち自分は他者より上の立場にいる、という相対的なプライドの高さを得たい。

何でも受け入れてくれる存在

- ・ 仕事上の依頼であれば「頼られている」「自分には存在価値がある」「認められている」「独りぼっちではない」と感じ、原則何でも引き受ける。
- ・ のちに「利用されただけ」「何でも押し付けられる」と思うこともしばしばで、即決はしないで、引き受けるかどうか少しの時間でも考えるようにしている。
- ・ 「クライアントを受け入れる存在でありたい」とは願っているが、そのようにならないこともあり、カウンセリングでは「何でも受け入れてくれる存在」には至っていないと思っている。
- ・ 何でも受け入れると疲れると思いは始めている(年齢による体力の低下もある)。何でも

受け入れる存在というよりも、「自分がやりたいと思ったもの」に関して受け入れるようにしたいし、勇気を出して「引き受けない」と言ったこともある。ただしカウンセリングについては、もっとクライアントを受け入れることができるように経験を積んでいきたいとは思っている。

いたずらっこ

- 基本はまじめな性格だと思っており、「人に嫌われたくない」という思いが強いことから、他者へのいたずらはしたくない。相手が喜んでくれるようないたずら（冗談・ものまね等）は、進んでやっている。
- いたずらを既存の規範への反抗と解すれば、ほぼやったことがない。落書きはおろか、立小便もしたことがない。やはり背景には「反抗して皆から嫌われたくない」という思いがある。
- いたずらを「まだ体験したことがない未知の領域へのちょっとした手出し口出し」と解するなら、その対象が人でなければやっている（故障した PC を無謀にも分解するなど）。直らなくてもよし、直れば幸運程度で考えている。対象は物であるから気軽に試すことができる。人間関係へのちょっかいは、緊張も走り、できていない。

ヒーロー志向

- 大いにあり。「今後頼られる」「今後ますます評価される」「自分のプライドを維持向上できる」「嫌われない」といった思いからヒーロー的行動は、これからもやっていくだろう。
- ヒーローは「相手の期待に応える」立場であるから、お願い事や将来的に自分の評価を上げることと思われるものには、全力で取り組む傾向がある。妥協しないことを自分に課している。「やれて当然」「やれないのは恥」。
- 子供のころ TV で観ていたヒーローは、世間には嫌われつつも最後は世間のために戦っていた。「いつか自分の努力は世間から評価され認められるのだ」という信念が根付いたのも、こうしたキャラクターによるものと思う。いまでも「努力すれば運が向き、成功する」という思いを持っており、努力しても報われないときは「自分の努力が足りないせいだ」とまた努力をする。自分が疲弊するまで頑張り、体調を崩したことも多い。「そもそも努力すれば運が向くということはありません」「頑張ってもよいことが必ずついて回るわけではない」と最近ようやく思うことができるようになり、ヒーローを続けるにしても、全宇宙・全世界を守るヒーローからご当地ヒーローレベルにランクを落としたいと思っている自分もいる。

仮面

- 「人から嫌われたくない」「見放されたくない」という一心で、仮面をつけることはよくある。世間ではまじめで、頼れる存在と思われているだろう。自宅にいても規則正しく生活し、常に勉強をしていると思われているが、実際にはごろごろしてぼーっとネットサーフィンをしていることもある。世間からの評価を失いたくないから仮面をつけているが、正直なところは疲れる。外したいと思うこともあるが、評価が下がる、嫌われるなど「自分にとって悪いことが起きるような気がする」ので、自分にとって些細と思われることは仮面を外すことも考えるだろうが、仕事や世間の評価に直結する何かの前ではこれからは仮面をつけていくだろう。
- 仮面を外すのは勇気がいる。もし仮面を外すことを決心したとしても、「それなら仕方がないな」と思ってもらえるような状況作りから始めると思う。

影

- 「期待に応える」「見放されたくない」「独りになりたくない」から努力もするし勉強もするし仮面をつけていい格好もするが、「ほんとは嫌い」「やりたくない」「見下す」「けなす」ということは心の中で思い、口の堅い友人には結構語っている。これも「本当の自分

の姿」なのだが、もちろん世間的にはこれをひた隠しにする。人には「人には言えないブラックな部分もあるし、ネガティブ感情を持つこともあるだろうけど、人間である以上それは自然なことだよ」と説明しても、自分の中では影を表出することは何か「悪いことをしている」ようで、友人に語って後悔することもある。影はあっても「仕方がないこと」であるが、できれば意識したくない。

- ・ 影がないようにふるまうのも本当に疲れる。しかし今の評価を落とすたくないから、これからも影がないようにふるまうだろう。

女性っぽさ

- ・ 私にとって女性っぽさというのは「母性があり、やさしい」「どんなことでも受け止める」という甘えられる存在。「周囲の期待に応える」「評価を得るために努力する」などは、形を変えた女性っぽさといえるかもしれない。自分自身疲れて甘えたいのに、周囲の評価のために甘えられる側に徹している。そういう意味では、自分の行動パターンは女性っぽさそのものといえよう。

まとめ

- ・ 私は他者の評価や期待に依存して生きており、そのために努力し、評価や期待を維持するために必死になっている。子供のころは相当の頑張り屋だったと自認しており、それが他者からの評価を気にするという考え方がうまく融合し、それ故に今日があると思える。今では他者に依存した生き方が、自分のパーソナリティとなっていると思う。
- ・ 一方で他者の評価や期待に依存する生き方に疲れを感じており、矛盾を抱えている。ストレートに「嫌われてもいい、評価されなくてもいい」と言えるわけでもなく、自分も相手も「それじゃあ仕方がないな」という言い訳や嘘を考えながら、他者の評価や期待に応えない自分になりたいとも考えている。
- ・ 高校時代は成績が悪くても人間関係で嫌な思いをしても、あまり気にしていなかった。自分が好きなことをやれていて赤点さえとらなければいい程度の考えしかもっていなかった。今と比べるともっと自分に正直で、他者を恐れなかった。しかし大学時代は「三流」と呼ばれた大学だけに死に物狂いで勉強し、他者からの評価を常に考える生き方に変わった。また前職在職中は、仕事を全うしても叱られ怒鳴られ、他者に対する怯えや恐怖を感じるようになり、「自分は他者からどう見られているのか。叱られたり怒鳴られたりするようにはしていないか」を気にしていた。退職後第二のキャリアが軌道に乗るまでは「今度は嫌な思いをしたくない」と、やはり「自分は他者からどう見られているのか」を意識していた。幼少のころあこがれたヒーローは孤立しているが、自分に正直に生きていた。今でもヒーロー志向は強いが、かつてのように自分に正直ではなく、他者の評価や期待に正直になった。
- ・ 他者の期待に応えるための努力のせいで、知識や考え方は深まったように思う。高校時代のような生き方では得ることのできない知識を持つことができ、仕事にも生かせることができた。しかし自分らしさよりも他者を優先するため、生きることが窮屈になったのは否めない。徐々に他者の評価に応えないことを実践していくものと覚悟はしているが、嫌われたくないが最優先で素直に「やれない」「できない」を言えないでいる。

実施前後の自己理解の変化

- ・ 実施後の自己理解を10だとすると、実施前は8。話すよりも書くことで自分のパーソナリティ形成の過程を考えることができた。

今後への気づき

- ・ 高校から大学に進学した時が一つの転換点となり、就職したときもまた転換点であったことが見えてきた。その中で自分らしさよりも他者の評価を気にするパーソナリティが固定化していったように思える。「自分は自分」と言える大らかさが欲しい。

感想

- ・ その場で語ってもらってもいいけれど、書くことにも意味があると思う。書きながら整理できる。面倒な作業かもしれないけれど、それを読むことで分かることもある。「話すのが苦手」「話しにくい話題で困っている」クライアントにも効果があると思うが、クライアントのレベルにもよるかもしれない。

考察

クライアントがこれまで考えていなかった枠組みを用いて分析する技法としては、Kelly(1955; 辻訳, 2016)のパーソナル・コンストラクト理論、キャリア分野ではクライアントに自身のキャリアの未来を想起させる「未来の1日」「授賞式」「私の墓標」などの誘導イメージ法 (Stoltz, Apodaca, Mazahreh, 2018) などが用いられてきた。こうした外部との人間関係あるいはまだ生じていない未来の出来事を質問するだけでなく、今回のように自分の中に仮定した人格 (ペルソナ) を言語化することでも、クライアントから新たな語りが生じる可能性を本研究では示せたと考えている。

一方で、AさんやBさんが指摘するように、この技法はクライアントの理解力・分析力・言語化能力などによっている可能性がある。今回は安全性を鑑みてカウンセラー資格所持者に協力を依頼したためスムーズに言語化が進んだが、クライアントによっては上手くいかない場合もあるかもしれない。

まとめと今後の課題

Stoltz et al. (2018) は、一般的なよくある脚本を使った誘導イメージ法ではなく、「クライアントによって語られたナラティブに基づく誘導イメージ法」を使うことを提案している。それにより語りが「クライアントのアイデンティティ経験に直接結びつく」からだとするが、その方式ではクライアントの新たなナラティブは生まれにくい可能性もある。

一方、本研究で用いたような技法は、クライアントの新たなナラティブを生じさせる可能性がある一方で、クライアントの理解力・分析力・言語化能力に依存している可能性がある。今後、こうした技法がどのような対象者に向けて用いるのが効果的かつ効率的なのか、あるいは効果と課題について明らかにしていく必要がある。

引用文献

- Cochran, L. (1997) Career Counseling - A Narrative Approach. Thousand Oaks: SAGE Publications (宮城まり子・松野義夫訳 (2016) 「ナラティブ・キャリアカウンセリング 「語り」が未来を創る」生産性出版)
- 河村茂雄 (2000) 心のライフライン—気づかなかった自分を発見する. 誠信書房.
- Kelly, G.A. (1955) The Psychology of PERSONAL CONSTRUCTS. New York: W.W.NORTON & COMPANY INC. (辻平治郎訳 (2016) パーソナル・コンストラクトの心理学. 北大路書房.)
- Savickas, M.L. (2011) Career Counseling. Washington, DC: American Psychological Association (日本キャリア開発センター監訳 (2015) サビカス キャリア・カウンセリング理論. 福村出版)
- 下村英雄・吉田修・石井徹・根本友之・菰田孝行 (2003) キャリアガイダンスにおけるカー

ドソート技法の効果—カード式職業情報ツールの開発 日本進路指導学会第25回大会
発表論文集、 pp.46-47.

Stoltz, K.B., Apodaca, M. & Mazahreh, L.G. (2018) Extending the Narrative Process:
Guided Imagery in Career Construction Counseling、 The Career Development
Quarterly、 66(3)、 pp.259-268.

渡部昌平 (2021) 相談支援におけるタロットの活用 秋田県立大学総合科学研究彙報、22(印
刷中)

依田尚也 (2014) ロールシャッハ・テストのフィードバックに関する研究：我が国における
これまでの研究と今後の課題. 学習院大学人文科学論集、 23、 67-89.



オンライン論集 日本産業カウンセリング学会 TODAY 第3巻 第3号
ISSN 2433-9369
2021年3月31日発行

編集 「日本産業カウンセリング学会 TODAY」編集委員会
委員長 小玉一樹
発行 一般社団法人 日本産業カウンセリング学会
会長 廣川 進